

「東アジアジュニアワークショップ 参加報告書」

京都大学大学院文学研究科修士1年 金 春喜

1 プログラム内容

今回の東アジアジュニアワークショップは、韓国・ソウルでの開催である。私たち参加学生は、3日間のフィールド・トリップおよび2日間のワークショップからなる5日間のスケジュールを、ソウル大学および国立台湾大学の学生や教員とともに過ごした。

前半のフィールド・トリップでは、レクチャーも含め、韓国の歴史・過去、そして現在と、現在からつくり上げていける将来の社会を見渡すことのできるような場所を訪れた。たとえば、ソウル大学の教授による東アジア社会の歴史についてのレクチャー、エスニック・マイノリティの集住地域たる中華街への訪問、および「少女像」からは、韓国の過去と現在（そして将来）に対して、また2016年以降の韓国における社会運動や、梨花女子大における学生運動についてのプレゼンテーションの数々、および韓国の最先端の福祉施設への訪問からは、韓国の現在や将来の韓国社会に対して考えや思いを巡らせるための重要な契機と示唆を得た。こういった経験から、歴史は断絶するものではなく、過去は脈々と現在へと繋がり、現在を生きる私たちが将来の社会を形づくっていきうのだということを、肌で感じる事となった3日間であった。

後半2日間のワークショップでは、3大学の学生たちが、おのおの自らの研究を発表した。ここで得られた経験については、第3節で詳しく述べる。

2 海外での経験および学習成果

私は、在日韓国人として22年余りの人生を生きてきた。そういう中で私は、一個の個人が生きているのは〈現在〉であるに違いないのに、国と国との間の〈歴史〉に足元を絡めとられるようなことがあるのは、〈現在〉をないがしろにすることであるに違いないと思いつけてきた。だからこそ私は、自らの背後にある〈歴史〉を見つめるといよりは、自らが確かに足をつけている〈現在〉と、見据えうる〈将来〉のほうに目を向けていきたいと強く思いながら、学業や日々の些事に励んできた。

しかし、今回のプログラムで強く感じたのは、国と国との〈歴史〉が〈現在〉をないがしろにするのではなく、こういった〈歴史〉をないがしろにすることこそが〈現在〉をないがしろにする、ということであった。それを特に強く思い知ったのは、2日目のフィールド・トリップで「少女像」を訪れた際に、ある日本の学生が問いかけた質問に対して、韓国の学生たちがみんな声を揃えて同じ回答をした場面においてであった。私自身は、「少女像」をめぐる歴史的な問題について不勉強であるばかりか、上に述べたような感覚を根拠に、これまで問題に目を向けるということ自体から離れがちでいたために、先の問いかけに対する回答を明確に用意することができないままだった。だからこそ、韓国の学生たちが声を揃えて堂々と意見を口にした際には、大きな驚きの感覚と、そのようにできない自分に対する恥ずかしさの感覚を覚えた。そして、今日までのように〈歴史〉から目を背け続けるような姿勢を保つことは、〈いま〉隣にいる彼らとの対話を、まったくもって不可能にする、ということを知った。どうしてこのことが問題かと言えば、私は〈いま〉隣にいる彼らと対話したい、と、そこに至るまで彼らと共有していた時間の中で、強く思い続けてきたからである。

以上のように私は、17年ぶりの韓国の地で今回のプログラムを経験し、これまでの人生を根拠に形づくってきた自らの学業や日々のことに対する姿勢、とりわけ国と国との〈歴史〉と〈現在〉を捉える視点を、根本から考え直す契機を得たと言える。

3 進路への影響

4月に進学してからというもの、4ヶ月余りの時間を大学院で過ごす中で私は、自らの問題意識や研究を続けることの意味や意義を問い続けてきた。問い続けたのは、私にとっての意味でもあり、社会にとっての意味や意義でもある。そんなことを考えるうちに私は、自らの研究を続けることに対する明確で前向きな意味や意義を見失いかけることが多くなっていた。

そういう中で私は、今回のワークショップにおいて、自らがこれまで積み重ねてきた研究内容を、自らの拙い英語で発表する機会を持った。発表を始めるまさにその直前までは、私の下手くそな英語で海外の学生たちに発表内容がうまく伝わるのかという不安はもとより、現代の日本社会に対して持ち続けてきた私の問題意識は韓国や台湾の学生たちにとって受け入れ可能なことなのかどうか、彼らと共有していくことは果たしてできるのか、と、つねに心もとなく思い続けていた。しかし、発表を終えてみれば、複数の学生たちが「私／私の友人も当事者だから、日本とわが国の状況は大きく違うけれども、強い関心を持って聞いていた」「あなたの研究は、日本だけでなく、東アジアという地域にとって、重要な意味を持つ研究だと思うから、これからも続けてほしい」「あなたの研究には続ける価値がある。途中でうまくいかないことが必ず出てくる分野だとは思いますが、やめないで、続けてほしい」という励ましの言葉をかけてくれた。私が自らの研究の「これから」を不安に思っていたことを見透かしたかのように、そのすべての友人が、「続けてほしい」との言葉を贈ってくれたのだった。

不安を募らせた発表を終え、友人たちから励ましの言葉を頂戴した後の帰路で私は、自らの研究を続けないという選択肢はないように思った。そして、今後は日本社会の枠組みの内側においてだけでなく、その枠組みを越え出てより多くの人々に伝えていくということを強く意識に置いた上で研究を続けていきたいと思うようになった。